

オスカー・ワイルドのアメリカ発見 二面性確立への旅

河内 恵子

1882年1月2日から12月27日までのアメリカ滞在はオスカー・ワイルド (Oscar Wilde) の作家としての人生にどのような意味をもっているのだろうか? 1880年に私家版の四幕劇作品『ヴェラ』をエレン・テリー (Ellen Terry) やクララ・モリス (Clara Morris) といった女優たちに送り、1881年に詩集を自費出版した以外、当時の彼には世に問うた出版作品はなかった。しかし、派手な言動ゆえに『パンチ誌』等に揶揄され、そのおかげで名前だけは広く知れ渡っていた。

アメリカで果たすべきワイルドの仕事は、1881年4月からイギリスで上演され、9月からはアメリカでも上演されていたギルバート (W. S. Gilbert) とサリヴァン (Arthur Sullivan) の『ペイシエンス』を、この笑劇のテーマとなっている唯美主義について講演することによって、宣伝することだった。宣伝媒体としてアメリカに渡ったワイルドの体験をこの間に書かれた手紙を手段に追跡してみよう。2000年に出版された『書簡集』にはアメリカ滞在中に書かれた103通の手紙が収められている。尚、下線は論者によるものである。

ロイアル・ボーイ!?

- (1) I now understand why the Royal Boy is in good humour always: it is delightful to be a *petit roi*. However if I am not a success on Monday I shall be wretched. (From a letter to Mrs George Lewis Between 3 and 7 January 1882)
- (2) The hall had an audience larger and more wonderful than even Dickens had. I was recalled and applauded and am now treated like the Royal Boy. I have several "Harry Tyrwhitts" as secretaries. One writes my autographs all day

for my admirers, the other receives the flowers that are left really every ten minutes. A third whose hair resembles mine is obliged to send off locks of his own hair to the myriad maidens of the city, and so is rapidly becoming bald. [...]I bow graciously and sometimes honour them with a royal observation, which appears next day in all the newspapers. (From a letter to Mrs George Lewis Circa 15 January 1882)

これらの手紙から判るのはアメリカに上陸した直後のワイルドの興奮状態である。想像していた以上の歓迎に驚き、同時に(1)の手紙が伝えるように、講演が首尾よく運ばなければどうなるのかといった不安を感じている。しかし、この不安も1月9日に行われた講演が成功した後は大きな自信に取って代わられた。それは次のことからわかる。つまり(1)の手紙では後のエドワード7世(Edward VII)である「プリンス・オブ・ウェールズ」、すなわち“Royal Boy”が常に上機嫌なのは人びとに歓迎されているからだとして理解できたと述べているが、(2)の手紙では自分自身が“Royal Boy”のように扱われ、エドワード7世の侍従であったハリー・ティリット(Harry Tyrwhitt)のような付き人が三人もいると書いている。講演はまだ一回しか行っていなかったが、自らの立場を“Royal Boy”と同等にみなすほどの自信がワイルドには生まれていた。新しい国、アメリカを歴史と伝統の国イギリスの王侯貴族が訪れているかのような表現がここでは使われている。

アメリカを二度にわたって(1842年、1867-68年)訪れたヴィクトリア朝の大家作家、チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens)の場合と同じかそれ以上の人気を初回の講演は博した、とワイルドは記している。講演はもちろんのこと、朗読でも人気があったディケンズとたった一度の講演を終えたばかりの自らの立場を同じレベルで語るのは、大胆な行為ととらえられよう。しかし、この大胆さを引き出した原因は推測できる。最初の講演を行った翌日の1月10日、ワイルドは著名人の写真撮影で有名であったナポレオン・サロニー(Napoleon Sarony)にポートレートを撮ってもらったのだが、このポートレート撮影こそディケンズがその第二回めのアメリカ訪問で始めたことだった。

写真家とポーズを取る被写体の関係は、前者が後者に撮影料を支払い、一定期間にわたってその写真の所有権を保持するというものだった。女優たちを例にとってみよう。ファニー・ケンプル(Fanny Kemble)には300ドル、サラ・ベルナルル(Sarah Bernhardt)には1500ドル、そしてリリー・ラングトリイ(Lily

Langtry)には5000ドルが支払われた。サロニーがワイルド側にどれほどの額を支払ったのかは定かではないが、この絶大な人気を誇る写真家にどうしても撮影してもらいたかったが故に、ワイルドのアメリカ講演のエージェントであり、サヴォイオペラのプロデューサーである、リチャード・ドイリー・カート(Richard D'Oyly Carte)とアメリカの責任者モース(W. F. Morse)は相場より低い料金での撮影に応じたと、伝えられている。サロニー撮影のワイルドのポートレートは唯美主義を広めるためにさまざまな場所でさまざまな人に配られた。そればかりか、帽子や葉巻の宣伝にも使われた。宣伝媒体としてのワイルドの価値はポートレート撮影によって強化されたのだ。

商売敵

手紙は不愉快な経験も語っている。やはりドイリー・カートのマネージメントの下でアメリカ講演を行っていた、元従軍記者のイギリス人アーチボルド・フォーブス(Archibald Forbes)とワイルドとの間で口論があり、両者の対立は微妙な影をワイルドの講演旅行に落とした。

- (3) I have something to say to the American people, something that I know will be the beginning of a great movement here, and all foolish ridicule does a great deal of harm to the cause of art and refinement and civilization here. [...]You have to speak of the life of action, I of the life of art. Our subjects are quite distinct and should be kept so. (From a letter to Archibald Forbes 20 January 1882)
- (4) Those foolish and lying telegrams are sent by Archibald Forbes, who, merely because his lectures are now a failure, revenges himself on me because I am thought a greater attraction, but they do not in any way mirror the feeling of the people of America, who have received me with love and courtesy and hospitality. Nothing could be more generous than their treatment of me, or more attentive than my audiences. Even the papers, though venal and vile, and merely the mouthpieces of the slanderer, often repent and write sensibly about me[...] (From a letter to Helen Sickert Circa 10 April 1882)

これらの手紙から確認できることは、フォーブスがジャーナリズムも巻き込ん

でワイルドを攻撃していたということと、ワイルド自身はフォーブスを敗北したライバルと見なしていたということである。また、芸術や唯美主義に真っ向から反対する行動の人、フォーブスと美の先導者たらんとするワイルドを同時期に同じ場所で講演させることを企画していたドイリー・カートにイギリスを多角的に売り込もうとする、すなわち、講演者を商品化しようとする、姿勢が明らかにみられる。

アメリカとカナダでの講演旅行が日常化するに従って、ワイルドは次にとるべき行動を考え始める。

日本

- (5) So every day I see something curious and new, and now think of going to Japan and wish Walter would come or could come with me. (From a letter to Helena Sickert 25 April 1882)
- (6) I wish I could be in London to show you a few houses and a few men and women, but I will be in Japan, sitting under an almond tree, drinking amber-coloured tea out of blue and white cup, and contemplating a decorative landscape. (From a letter to Frances Richards Circa 16 May 1882)
- (7) I am just off to the Art Schools and the University. Tonight I lecture as usual, will be home I don't know when. I must go to Japan, and live there with sweet little Japanese girls. (From a letter to Norman-Forbes-Robertson 25 May 1882)
- (8) You dear good-for-nothing old Dry-point! Why do you not write to me? Even an insult would be pleasant, and here am I lecturing on you, see penny rag enclosed, and rousing the rage of all the American artists by so doing. [...] Also when will you come to Japan? Fancy the book, I to write it, you to illustrate it. We would be rich. (From a letter to James McNeill Whistler ? June 1882)
- (9) When I had the privilege of dining with you you spoke to me, if I remember right, of Professor Morse, the Japanese traveller. As I am going to Japan

myself it would be of great service to me to get any instructions or letters from him which would enable me to see their method of studying art, their schools of design and the like. [...] I am so anxious to see the artistic side of Japanese life that I have ventured to trespass on your courtesy. I have just returned from the South and have a three-weeks holiday before Japan, and so find it not unpleasant to be in this little island where idleness ranks among the virtues. (From a letter to Charles Eliot Norton Circa 15 July 1882)

アメリカ講演の後、オーストラリアでの講演をエージェント側からは提案されたが、ワイルドは日本に行くことを考えていた。日本への関心が強くなったのが見られるのはオックスフォード大学の後輩であるロッド (James Rennell Rodd) の処女詩集をアメリカで出版しようと奔走し、その装丁を考えている時である。出版を引き受けたストッダート (J.M.Stoddart) に「日本の扇に施されているような」「グロテスクではなく、美しい」しつらえを執拗に要求しているのだ。この詩集は『薔薇の葉と林檎の葉』として出版された。

ワイルドは日本を訪れる際には画家を同行することを考えていた。H・シッカート (Helena Maria Sickert) への手紙には画家である、彼女の兄ウォルター (Walter Richard Sickert) に言及しているが、ワイルドが共にアメリカに行きたいと実際に願っていた画家はウイスラー (James McNeill Whistler) だった。しかし、自分が日本について書き、ウイスラーが日本を描くという計画が現実になることはなかった。画家は作家の誘いに如何なる反応も見せなかったのだ。日本で教えた経験もある親日家、モース (Edward Sylvester Morse) に会う機会を熱望していることから、ワイルドが「小さな島国」の芸術に触れたいと思っていたのは間違いないだろう。だが、この情熱がアメリカ滞在中に再び表明されることはなかった。新しい夢が彼の心をとらえたのだ。演劇である。

演劇

ワイルドが『ヴェラ』を女優たちに送ったことは先に述べたが、アメリカで女優メアリー・アンダーソン (Mary Anderson) と出会ったことで、この劇の上演の可能性を探る機会を得るとともに、彼女のために新しい作品を創作する意欲をもつことになる。メアリー・アンダーソンに宛てた手紙を見てみたい。

- (10) All good plays are a combination of the dream of a poet and that practical

knowledge of the actor which gives concentration to action, which intensifies situation, and for poetic effect, which is description, substitutes dramatic effect, which is Life. I have much to talk to you about, having thought much since I saw you of what you could do in art and for art. I want you to rank with great actresses of the earth. (Early September 1882)

(11) If you desire, as I feel that you at any rate do, to create an era in the history of American dramatic art, and to take your assured rank among the great artists of our time, here is the opportunity : and remember we live in an age when without art there is really no success, *financial* or otherwise. (September 1882)

(12) Here is an opportunity of doing something fine in art and I think if you do not avail yourself of it to the full you will be missing a chance such as may not occur again[...] (? October 1882)

構想はできていたが、女優のメアリー・アンダーソンに出会うことによって書き上げられることになった作品が『パドヴァ公爵夫人』である。ワイルドの手紙は演劇の世界における女優の重要性を語り、すぐれた作品を創造するためには劇作家と俳優との協同作業が不可欠であることを主張する。10月13日をもってアメリカ講演旅行は終わったが、12月27日にこの地を離れるまでの二ヶ月あまりの間、マラリアに罹るといふ災難はあったとしても、ワイルドは女優たちとの関わりを中心に自らの劇作家としての道を切り開いていたのである。笑劇『ペイシェンス』の宣伝媒体としてアメリカに送り込まれたワイルドは10ヶ月におよぼアメリカ滞在中に創造者へと能動的に変身したのである。

スターと道化師

イギリスのジャーナリズムのカリカチュアの対象であったワイルドはアメリカでもやはりジャーナリズムと微妙な関係にあった。時代を代表する写真家によって撮影された姿はポーズを取る人気スターそのものであり、実際、写真はプロマイドのようにもてはやされた。しかし、ジャーナリズムが痛烈に揶揄したワイルドの姿は人気スターのそれからは程遠い。これらの全く異なるワイルド像が各地を講演して旅するオスカー・ワイルドとともにアメリカを駆け巡った。そして、

アメリカでの活動はイギリスのジャーナリズムにフィードバックされ、唯美主義者ワイルドの姿とそのメッセージは両国のジャーナリズムを賑わせた。創造者としての能動的なワイルドの背面にはジャーナリズムのカリカチュアの対象としての受動的なワイルドが存在していた。この二重の存在は生涯を通じてのワイルドの姿勢となるが、この基盤が打ち立てられたのはアメリカ滞在中であったといえる。ほとんど同時期に発表された右の写真とカリカチュアを見てみよう。

著しく対照的な二つの絵は両者とも真実でもあれば、偽りでもある。つまり、アメリカでのワイルドは人気者のスターでもあれば、ジャーナリズムによって面白く揶揄される道化者でもあった。写真とカリカチュアの両方に利用されて、あるいは両者を利用して、ワイルドは名前を売り、「書く」という自らの仕事を獲得した。宣伝媒体であったワイルドは、彼自身を宣伝する媒体を、講演旅行をとおして自らのものにしたのだ。

描かれるオスカー・ワイルド

オスカー・ワイルド自身やきわめてワイルドに似ている人物は、彼が生きたヴィクトリア朝時代から現代にいたるまでさまざまな文学作品において描かれてきた。しかし、アメリカ講演中のワイルドを扱ったフィクションはきわめて少ない。ここでは、ワイルドのアメリカでの旅程を追った作品、ルイス・エドワーズ (Louis Edwards) の『オスカー・ワイルドのアメリカ発見』(Oscar Wilde Discovers America) を紹介しておこう。1882年1月15



ナポレオン・サロニー撮影の
ポートレート (1882年1月)

HOW FAR IS IT FROM



THIS

or



THIS?

猿とワイルドを比較している
カリカチュア
『ワシントンポスト』
(1882年1月22日)

日付のノーマン・フォーブス・ロバートソン (Norman Forbes-Robertson) 宛の手紙でワイルドはニューヨークでの講演が大成功であったことや、アメリカで人気者になっている自分自身の状況を伝え、その忙しさを緩和するために秘書たちが雇われていると報告した後、「それからもうひとり、黒人の使用人がいる」と続けている。“Also a black servant, who is my slave—in a free country one cannot live without a slave—rather like a Christy minstrel, except that he knows no riddles” アメリカからの手紙のなかでただ一度だけ言及されているこの人物は William Traquair という名の青年で、ワイルドの講演旅行に世話係兼ボディガードとして帯同した。エドワーズの小説はこの青年がワイルドとの出会いをとおして成長していくさまを描くビルドゥングスロマンであり、背景として、当時のアメリカにおける人種差別、同性愛、アメリカとイギリスの摩擦といった問題が取り扱われている。事実と創りごとを巧みにより合わせたこのフィクションはオスカー・ワイルドの二面性が講演旅行という過程のなかで創られていく様子を克明に伝えて興味深い。

参考文献

- Blanchard, Mary Warner. *Oscar Wilde's America: Counterculture in the Gilded Age*. New Haven: Yale Up, 1998.
- Edwards, Louis. *Oscar Wilde Discovers America*. New York: Scribner, 2003.
- Ellmann, Richard. *Oscar Wilde*. London: Hamilton, 1987.
- Kingston, Angela. *Oscar Wilde as a Character in Victorian Fiction*. New York: Palgrave, 2007.
- Lloyd, Lewis, and Henry Justin Smith. *Oscar Wilde Discovers America*. New York: Blom, 1967.
- Wilde, Oscar. *The Complete Letters of Oscar Wilde*. Eds. Merlin Holland and Rupert Hart-Davis. New York: Holt, 2000.
- 河内恵子 『深淵の旅人たち—ワイルドとF・M・フォードを中心に』慶應義塾大学出版会 2004